

見習い試験

リタは治療師の家を訪ねた。

お母さんから言われて、治療師が見習いを取る気があるかどうか尋ねに来たのだ。治療師の家は村の外れに近いところにあつた。治療師は以前は街にいたのだが、今年の春からこの村に来ている。

村に治療師がいないと病人が出た時も街まで呼びに行かなければならない。そうでなければ病人を街に連れて行く必要がある。どちらにしても、病人の苦しみは長引くし、手当てが遅れて死んでしまうこともある。

それで村長がずっと前から治療師組合にかけあつて、治療師を一人派遣してくれるように頼んでいたのだ。ようやく今年の春になつて治療師ハンナがこの村に来てくれたという訳である。

治療師の生活に必要な家は村長が用意し、食料その他生活に必要なものがあれば、村の住民が協力して提供することになつていた。ただし、病気の治療に必要な費用については病人が負担する決まりであつた。

「こんにちは」

「ああ、リタかい。どうしたんだね。眼が痛むのかい？」

「うづん、お蔭様で眼は大丈夫。そうじゃなくて、治療師は見習いを置いたりしないかと思って」

「ああ、確かに見習いでも居てくれて、細々した雑用をしてくれると楽だと思うことはあるがね。しかし治療師組合の見習いは誰でもいいという訳にはいかないんだよ。村長に言われてきたのか、マルカに言われてきたのか知らないが、そういう訳だから、誰か人を寄越すのは結構だと伝えてくれないかね」

「どういう人だったら治療師の見習いになれるの？」

「ああ、まあ簡単には言えないけれどね。口が堅い、つまり秘密を守る人でなければいけない。それから健康であることも条件になるねえ。何といっても信用できる人でないといけないんだよ。だから、ただそのへんで暇にしている農家の末娘とかを寄越されても、身近に置く訳にはいかないんだよ」

「じゃあ、あたしも駄目ね。あまり口が堅いとは言えないわ。ついこのあいだまでカラタ姉さんのところでお話を習っていたのよ。それに健

康だともいえないわ」

「お前が見習いになるというのかい。それはマ
ルカの差し金なのかい」

「お母さんには相談したけれど、あたしの考え
なの」

「治療師は楽な職業じゃないんだよ。しかも途
中で投げ出すことはできないんだよ」

「つらいことは耐えられると思うの。でも、見
習いの資格がないんじゃないわ」

「いや、資格がないわけじゃないんだよ。健康
というのは病気をしていないということ、怪
我はいいんだ。それに物語りをするのと秘密を
守るということは別のことだと思っね」

「じゃあ、あたしも見習いになれるかしら。で
も、まだお父さんに相談してないので、お父さ
んの許可が下りないとほんとにも言えないの。で
も、あたし、治療師の見習いになったら、ほん
とに一所懸命に働くわ」

「まだいいとは言っていないよ。そうだね、ま
ずはガラムの許可を得て来るんだね。それから
考えるところよ」

それでリタは昼食の時にお父さんに話をした。

「お父さん、あたし治療師の見習いになりたいの。いいかしら」

「なんだって、急にそんなことを思い付いたんだい。何かの組合の見習いになるにしても、もう少し先でもいいじゃないか」

「お父さん、お願い。あたし治療師の見習いになりたいの」

「まあ待て。駄目だとは言っていないぞ。ちよつと待てよ、治療師と言ったら一級組合じゃないか。

お前、お父さんより上級の職人になってしまぞ」

「そうなる何か都合が悪いんですか、あなた」

「いや、都合は悪くないが……。待てよ、一級組合の見習いは試験があるんじゃないかな。まあ

あそうだな、試験に受かってから考えるんだな」

「じゃあ、見習いの試験を受けてもいいのね」

「ああ、だけど、落ちてもがっかりするんじゃないよ。試験は簡単じゃないと思うからね」

「ありがとう、お父さん」

リタは昼食後、すぐに治療師の家に行ったが、治療師は出かけていて留守だった。仕方がないので、家に戻って、治療師の見習いになったらあまり家の手伝いが出来ないかも知れないと思って、家の周りの草刈りをしたりした。

そのあとカラタ姉さんの家に行ってお話を聞くかと思っただけれど、治療師が戻っているかも知れないと、もう一度訪ねた。

「こんにちは」

「なんだい、リタ。また来たのかい」

「お父さんの許可をもらってきました。見習いの試験を受けてもいいって」

「試験って何だね？」

「一級組合は見習いになるにも試験があるんですよ。お父さんがその試験を受けてもいいって」
「ああ、街では見習いになりたい子が大勢いるからね。それで試験をして選抜するんだよ。とはいっても、そうだね、お前にも何か試験をした方がいいだろうね。ああ、確かにそうだよ。試験の準備をする必要があるね。まあ、面倒だこと。それじゃあ、三日後の朝おいで」

リタはその三日間、落ち着くことが出来ないで過ごした。試験ってどんなことをするんだろう。重いものを持ち上げたり、素早く走ったりする試験なのだろうか。でもそんな試験は治療師の仕事とは関係がありそうもない。お話に出てくる魔法使いの試合のように謎々を出されてそれ

を解かなければならないのだろうか。

お父さんに聞いても、お母さんに聞いても知らないという。お母さんは試験はリタが受けるのだから他の人の助けを借りてはいけないと言った。

試験のことは何もわからないので、いつものようにカラタ姉さんのところにお話を聞きに行つたのだが、リタはカラタ姉さんの話していることが少しも耳に入らなかつた。

「聞き手がそんなに上の空では、話し甲斐がないわ。今日はやめましょ。どつしたの」

「治療師の見習いになる試験があるの。でも何を準備したらいいのかわからなくて」

「それは大変ね。でも、リタならきつと受かるわ」
そう言われてもあまり気が楽にならなかつた。家に帰ってから洗濯やら掃除やらをして時間をつぶした。夜もあまり眠れず、試験の日の朝、リタは少し寝不足気味で、治療師の家を訪ねた。

「さて、それじゃあ、ここに問題を書いておいたから、こつちの紙に答えを書いておくれ」

リタは渡された紙を見て愕然とした。頭の中が真っ白になり、目の前が真っ暗になった。もう見習い試験には落ちたと思った。それでもリタはそのことを治療師に告白しなければならぬ

と思った。

「あのー、あたし字が読めないの」

「なんだって」

「あたし文字の読み書きができないの」

「おや、まあ。それは困ったね」

「読み書きが出来ないと治療師にはなれないの？」

「ふーむ、治療師は読み書きができないといけないね。ああ、だが、見習いがそうだという訳ではない。しかし、困ったね。せっかく試験問題を作ったのに無駄になってしまったよ。よし、そうだ、今から文字を教えてやるから、それを覚えておいで。それを試験の第一問にするよ」

「ありがとう」

「よし、この紙に書いてあげよう。アー、ベー、ケー、デー、エー、エフ、ゲー、ハー、イー、カー、エル、エム、エヌ、オー、ペー、クー、エール、エス、テー、ウー、イクス、ユー、ゼータ。この二十三文字だよ。今書いたのが大文字で、小文字がこれだ。全部区別して読み書き出来るようになったら、おいで」

「はい、わかりました。でも、文字って随分少ないのね」

「文字は少ないが、言葉は多い。文字を覚えた

ただけでは読み書きは出来ないんだよ。だが、まずは文字を覚えなければならぬ」

家に帰って、さあ文字の読み書きの練習をしようと思ったリタは、そこで困ったことに気づいた。読むのは文字を書いてある紙を借りてきたからいいのだが、書くための道具がない。文字を書くにはペンとインクが必要だが、どちらもリタの家にはなかった。それに紙もなかった。

お母さんに頼もつかと思っただけれど、ペンとインクと紙を買うには街まで行かなければならぬ。リタはそんなに待っていられなかった。それに試験のことは自分だけで解決しなければならぬと思っただ。

その時、リタはずっと小さい頃にサウたちとした遊びを思い出した。それは地面に樫の小枝で絵を描くという遊びだった。絵を描くだけなら樫でなくてもよいのだけれど、固い樫の枝は地面に絵を描くのに向いていたし、樫の枝を使うことがその遊びの決まりになっていたのだ。

リタは小さい頃にそうしたように、鍛冶小屋に行つて、お父さんが農機具の柄にするために貯めてある樫の木から、払い残してあつた小枝

を切り取ってもらってきた。それから玄関脇の地面を足でならして、字を書きやすいように整えた。

それからは、アーベーケーデーと唱えながら、檜の小枝を振り回して地面に文字を書いて練習した。治療師に借りた紙を見ながら、大文字を一通り書きおわり、小文字を書きはじめてから、リタは戸惑いを覚えた。

ペーの大文字と小文字はそっくりだわ。大きさは小文字が小さいけれど、一文字だけ見せられて大文字か小文字か聞かれたら答えられない。それからリタは治療師の書いた文字をよく見つけて、小文字のペーは棒が丸の上に突き出していること発見した。

オーは小文字がまん丸で、大文字は少し縦長だった。エスは大文字には最後に尻尾のようなものが付いているが、小文字には尻尾がない。

しかし、そうするとウーの小文字とヴーの小文字の区別が難しくなる。これはよく見るとウーの小文字には脇に縦棒がついていたので区別がついた。ヘーとニーも縦棒の長さが少し違うだけなので紛らわしい。バーとダーの小文字は似ていないのだけれど、時々どっちがダーの小文

字がわからなくなる。

何度も地面に文字を書いていると、地面が掘り返されて柔らかくなつてしまい、土が崩れてきれいな線が描けなくなる。そうになると、リタは足で地面を踏み固めてもう一度最初からアーチャーチャーダーと書き出すのであった。

一晩寝たら忘れてしまつかも知れないと、夕方に治療師の所に行つて覚えた文字を試験してもらおうと思つたが、夕食の時間も近かつたので断念した。それに、一晩したら忘れてしまつような覚え方ではきつといけないのだと思う。

「覚えてきました」

次の朝、リタは勢いよく治療師の家のドアを叩いた。

「なんだね、ずいぶん早いね」

期限は切られなかつたけれど、あまり遅くなると不合格になるかも知れないとリタは思ったのだ。だから、早いと言われるとリタはうれしかった。

「そうだね、ひとつ忘れていたことがあってね。数字も覚えてもらわないといけないと思つてね。それじゃあ、数字を教えるから、後で数字と文

字と一緒に試験しようじゃないか」

せつかく覚えた文字を試験してもらえなかったのは、残念だったが、リタは何か新しいことを教えてもらえるのでワクワクしていた。それは試験に受かって治療師見習いになるということとは別の楽しみであった。

「一はイーを一つ。大文字の時もあるし、小文字の時もある。どちらで書いても数としては同じだ。二はイーを二つ、三はイーを三つ並べて書く」

「なんだかとても簡単に思えるわ」

「そして五はヴーを一つ書く」

「治療師、四が抜けているわ。でもきつと四はイーを四つ書くのね」

「四を忘れていたわけではないんだよ、リタ。四はたいていの場合、イーを書いてからヴーを書く。引き算は出来るかなリタ」

「簡単な引き算なら……」

リタはあまり計算が得意ではない。引き算どころか足し算だって何桁もある計算はなかなかうまく出来ない。急に心細くなってきた。

「つまり、四は五引く一という意味なんだよ。もつとも書くだけなら、引き算は使わなくてもいい

んだよ。おまえの言うようにイーを四つ書いても四という数字になる」

「わかったわ。あたしが書く時はきつとイーを四つ書くようにする」

「さて、六はヴーの右にイーを書く。七はヴーの右にイーを二つ、八はヴーの右にイーを三つだ。そして十はクスを一つ書く」

「ちよつと待つて。その文字は見たことがないわ」
リタは治療師に借りた紙を取り出して、もう一度見てみたが、その文字は載っていないかった。

「おや、本当だよ、クスが抜けているね」

リタが治療師に紙を見せると、治療師はそう言つてクスの大文字と小文字を最後につけ足した。「九はまた引き算で、イーの右にクスだ。だいたいわかっただろう。十六はクス、ヴー、イーと書く。リーは五十、チャーは百、ダーは五百、ミーは千。ヴー、リー、ダーは引き算には使えない。それに、リーとチャーから引いていいのはクスだけでイーは引けない。ダーとミーから引いていいのはチャーだけだよ。この紙にちよつと例を書いておいてあげようかね」

家に帰つてまたアーバーチャーダーと書き、数

字の練習をしようとして、リタは気がついた。引き算を使わないで書くのはいいけれど、それでは引き算を使った数字を読む練習ができない。結局、読む練習をするためには、引き算を使って書く練習もしなければならぬのだ。

それから数字の練習をするにはなにか元になる数字が必要だったので、リタはいろいろなものを書き始めた。アーバーチャーダーは二十一文字だったけれど、クスが増えて二十二文字。これは簡単に書けた。簡単過ぎてあまり練習にならない。

お父さんの歳は四十一だから、クス、リー、イー。お母さんは三十九だから、クス、クス、クス、イー、クスかな。二人合わせると、リー、クス、クス、クス。リタの歳まで合わせると、クス、チャー、ヴー、イー。

それからリタは家の中に入って、お皿の数を数え、柱の数と窓の数を数えた。鍛冶小屋の軒下に積んである薪を数えるのは大変だった。苦勞して数えたのに、チャー、チャー、リー、イーという単純な数字だったのにはがっかりした。

それから家のそばに生えている木の葉を数えようとしたが、木の葉は風に揺れてすぐにどこ

まで数えたかわからなくなってしまふ。蟻も動き回るので数え切れない。小川に行つて小石を数えようとしたが、どこまでが小石でどこからが砂なのか分からなくなって止めた。

でもそれでは千以上の数字の練習が出来ない。リタはしばらく悩んでいたが、やがて一たす一は二。二たす二は四、四たす四は八と足し算を始めた。初めのうちは増え方が少なかったが、十六をクス、ヴー、イーと書く辺りから、どんどん数が増えていき、クス、クス、クス、イー、イー。リー、クス、イー、ヴー。チャー、クス、クス、ヴー、イー、イー。チャー、チャー、リー、ヴー、イー。ダー、クス、イー、イー。ミー、クス、クス、イー、ヴー。ミー、ミー、クス、リー、ヴー、イー、イー。

そしてその次の四千九十六を言おうとして、もう数字が足りなくなつたことに気づいた。ミー、ミー、ミー、クス、チャー、ヴー、イーととりあえずは言えるけれど、その次の八千百九十二はもう本当に数字がない。

本当はもっと多くの数を表す数字があるのだけれど、一度にたくさんは覚えられないと思つて治療師が少しだけ教えたのだからとリタは思った。

それから、もう一度文字のおさらいをしていたら、夕食の時間になった。リタがちぎったパンを並べて数えていたら、お行儀が悪いとお母さんに叱られた。

夕食後、三たす二は六とやりはじめ、十二、二十四、四十八、九十六、百九十二、三百八十四、七百六十八、千五百三十六、三千七十二と数えた。それから、四たす四はとやろうとして、それは二の時と同じだと気づいた。五たす五は十、二十、四十、八十、一六〇、三百二十、六四〇、千二百八十、二千五百六十。

六たす六は三の時と同じだから飛ばして、七たす七からずっと数え、八たす八は二や四と同じでつまりは一つおきに同じ列がくると分かり、それから、九たす九、十一たす十一、十三たす十三というように計算していった。

次の朝、リタは泉に水を汲みに行く途中で木の数を数え、地面に書くのが面倒だったので、持ち歩いていた櫛の小枝で空中にその数を書いた。なんだ、地面に書く必要はないんだわとそこで気づき、それから小枝を振って空中に文字を

書いて練習した。空中に書けば消す必要がない。

リタはもう十分練習出来たと思い、治療師の家の訪ねた。

「もう覚えたのかい、まあいいだろう、じゃあ、試験をしようかね」

「あの、あたしペンを持っていないので、答えを棒で地面に書いてもいいですか」

「ああいいとも。紙が無駄にならなくてその方がいいよ。じゃあ、あたしも問題を地面に書くとうかかね。まずは、大文字の読みからいくよ」
そして治療師は次々と地面に文字を書き、リタはダー、ニー、ミーと次々と答えていった。

「リーよ、小文字のリー」

「ほら、今は大文字をやっているんだよ。大文字では何だい？」

「ああ、でも、小文字のリーにしか見えないわ」
「イーだよ」

リタはそれを聞くと急に悲しくなった。間違えた。間違えてしまった。試験に落ちてしまったんだわ。そう思った時にはもう抑えることが出来なくて、眼から大粒の涙がポロポロとこぼれ落ちた。

「どうしたんだい、リタ。ほら、試験を続けて」
「あたし、試験に落ちてしまったんだわ」

そう言つと、リタはしゃがんで声を立てて泣き出してしまった。

「まだ決まった訳じゃないよ。なんだね、お前は。一文字くらい間違えたってそれで不合格という訳じゃないんだよ。だいたい、大文字のイーと小文字のリーは区別がつかないんだから、間違えというほどの間違いじゃないんだよ」

そう言われてもリタは急に泣き止めることは出来なかった。

「こら、立って試験を続けるんだよ。続けないと不合格にするよ、リタ！」

治療師が強い調子で叱るとリタはようやく立ち上がった。それからリタなんとか治療師の出す問題に答えることが出来た。小文字の読み方も終わり、大文字の書き方のところで、治療師の問題に答えてリタがイーの文字を書くと、治療師は納得したようにうなずいた。

「そうだったのかい。さっきの間違いはあたしがヒゲを付けなかったからなんだね。こいつは悪いことをしたね。この上下のヒゲはかざりなんだよ。あとで説明してあげるよ」

その後、治療師の出す書き方の問題も、数字の読み方と書き方もリタは間違えずに答えることができた。

「よし、第一の問題は合格だ。よく勉強してきたよ、リタ」

そう言われて嬉しかったことは嬉しかったのだが、途中で泣き出してしまったことがなんだかばつが悪くて、リタは素直に喜べなかった。

それから治療師は大文字と小文字の違いについて説明し、ヒゲ飾りが文字にとって本質的でないことを説明した。

「それじゃあ、第二の問題を出すから、昼食を取ったらすぐにここにおいて」

昼食後、リタが治療師の家に行くと、治療師はついて来いと言って歩きだした。

「子供は好きかい？」

「ええ」

「じゃあ、悪ガキはどうだね」

「嫌いよ」

「あたしも嫌いだね。ところが、これからその悪ガキに会いに行くのさ。奥のカシノのところのビノは知ってるかね」

「ええ、知ってるわ。見事な悪ガキね」

「そのビノが木から落ちて腕を折ったんだが、怪我をしてるっていうのにちっともじっとしてないんだよ。初めは可哀想だから痛み止めを飲ませていたんだがね、無茶をするんで今は痛み止めも止めているのさ。そしたら泣くわ、喚くわ、暴れるわで手がつけられないんだよ。だから、第二の問題はカシノが畑仕事から帰ってくる夕方までビノを大人しくさせておくこと」

「無理だわ」

「そう言わないでやってごらん。そうだね、家から外に出なければ大人しくしていたということにしようかね」

治療師はカシノの家に着くと、ビノの腕に巻いた包帯を確かめ、緩んでいたので巻き直した。骨はズレていなかったようだ。

「助手がいると包帯がきつく巻けていいね。じゃあ、夕方までしっかりやるんだよ」

そして治療師は帰ってしまい、カシノも畑に出かけてしまったので、リタとビノだけが家の中に残された。

「あなたは怪我をしてるんだから、大人しくしてなきゃ駄目よ。そうしないと、いつまでも治

らないわよ」

リタはビノが言っことを聞かないのは知っていたが、一応言っておいた。

「ねえ、その眼、どうしたのね」

ビノは興味津々でリタの顔をじろじろ見てから聞いてきた。

「これは転んだ時に折れた木の枝が眼に刺さったのよ」

まったく悪ガキだわと思いつながらリタは答えた。

「なあんだ。魔物と取り引きでもしたのかと思っただのに」

「ふふふ、駄目ね。表向きの理由ってものが必要なのよ」

「それじゃやっぱり取り引きしたのかよ。代わりに何を手に入れたんだ？」

「あんたみたいな悪ガキには教えないわよ」

「なんだよ、教えるよ」

「いやよ、あたしに命令しないで」

「教えるよ、ケチ」

「あんた、あたしにそんな態度をとっていいと思っっているの」

リタが脅しをかけると、ビノは急に態度を変

えた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

リタはこの悪ガキを扱つコツがわかつてきた。

「お茶を淹れてちょうだい。お砂糖とミルクも入れるのよ。それから何かお菓子を持って来てちょうだい」

「なんだよ、急に偉そうに」

「これまで取引きのことは隠してきたけれど、あなたにはバレてしまったからね。いい子の振りしても仕方がないってこと。さあ、早く用意して」「いいのよ、おまえのことを言いふらしてやるぞ」

「馬鹿ね。あなたのいうことなんか誰も信じないわよ。なんのためにあたしがこれまでいい子の振りをして来たと思ってるの。それにそんなことをしたら、あなたは一生湿った石の下で蠅を食べて暮らすことになるわよ」

「わかったよ、お茶を淹れてくるよ。それから、うちにはお菓子なんかないよ」

「なんでもいいから甘いものを出してよ」

「昨日父ちゃんが取って来た蜜蜂の巣でもいいか」
しばらくすると、ビノがお茶を淹れて持ってきて。片手でも結構器用に運んでくる。一口飲ん

でみると薄くてほとんど味がしない。

「あんた、お茶の淹れ方も知らないの？ 薄すぎるわよ」

「うちじゃいつもこれだぞ」

「まあいいわ。これが蜜蜂の巣？ すかさかじゃないの」

「父ちゃんが蜂の子を突いて喰っちまったからな。でも、しゃぶれば甘いぞ」

「わかったわ、これで我慢してあげる。その代わり、何か面白い話でもしてちょうだい」

父ちゃんに話したら嘘つくんじゃないかねえって言われたけど、これは本当の話なんだ。

野兎用に仕掛けた罫を見に行った時のことだよ。何しろこの辺は野兎が多いだろ。父ちゃんなんか、野菜を育てているんだか、野兎を飼っているだかわかりやしないうって言うてるけど本当だよ。でもさ、野菜より兎の方がうまいよね。

それで、おれは罫を仕掛けるのがうまいんだぜ。父ちゃんなんか雑だから全然だめさ。まず、こう兎の通り道に仕掛けるわけさ。そりゃあもう地形を見ればわかるんだよ、ここを兎が通るっていう道がさ。それから、目立たないように隠

して置かなきゃならないだろ。それだけじゃ駄目さ、人間の匂いが着くからな。それで、兎の糞を塗りつけて匂いを消すんだよ。

そんなわけで、今晚は兎のシチューが喰えるかなと思いながら、罨を見に行っただよ。罨は三個仕掛けておいたんだけど、そのうち二個は空で、最後の一個を見に行くと、もう近づく前から何かがピクピク動いているのがわかったんだ。やったあ、って思いながら近づいて見ると、これが兎じゃないんだ。時々はそういうこともあるんだ。兎用の罨だからって、兎しかかからないって訳じゃないからね。野鼠がかかることもあるし、何を勘違いしたんだか、モグラが掛かっていたこともあったな。このあいだなんか、父ちゃんが引つかかったぜ。思わず笑っちまったら、ぶん殴られたけどな。

それで罨に何が掛かっていたかっていうと、醜い小鬼なのさ。こんなちっこいやつで、骨と筋ばっかりでシチューに入れてもダシしか取れそうもない。それで罨ごとぶらぶら振り回してやったら、痛い痛いと言き喚くんだ。

助けて、助けてっていつからさ、ただじゃあ助けられないって言つと、なんでもするから助け

てっついでいので罾を外してやったんだ。もちろ
ん、逃げ出さないようにしっかりと脚を握った
ままだ。

お前のせいで兎を捕まえそこなつたぞつて言っ
たら、じゃあ国中の野兎をこの畑に追い込んで
やるつて言っただけで、俺だつて馬鹿じゃない。
そんなことをされたら、この辺の作物はみんな
食い尽くされてしまっじゃないか。

それでお宝を出せ、宝石でも金貨でも出してみ
せろつて言っただよ。そしたら、今は持つてな
いから、取つてくるつて言っのさ。取つてくるか
ら脚を放せつて。そんな嘘じゃあ騙されないぜ。
手を放したら逃げるに決まってるじゃないか。
だから、信用出来ねえ、このままお前の家まで
案内しろつて言っただよ。小鬼は嘘をつかね
え、嘘をつくのは人間だけだなんてやつは言っ
ただけど、そんなことあるものか。

それで片足はおれが握つたまま、小鬼は残りの
片足でびよんびよんと丘の下の茂みまで飛び跳
ねて行つたんだ。おれは腰をかがめて片足もつて
ついて行つた。茂みの陰に隠れるように小鬼の
家の入り口があつたんだが、狭くてとてもおれ
は入れねえよ。

そこから手を伸ばしてお宝だけ取ってこいって
言つてやつたんだが、やつは、お宝は家の奥の
奥に大事に仕舞つてあるからとても届かないと
いう訳さ。それもまあもつともだよな。

そしたら小鬼のやつ、なんか呪文を唱えたんだ
よ、そして気がつくとおれはこぎれいな家の中
に入つていたんだ。どうも小さくされちまつた
みたいだった。その上、小鬼のやつはおれの手
から抜け出していきさ。

お茶でも飲みねえとか言つんで、ここまで来た
らあとはお宝をもらつて帰るだけだからまあい
いかと思つて、出されたお茶を飲んで、お菓子を
食べてさ。このお菓子が木の根っこみたいに
しか見えないんだが、これが不思議と甘くてう
まかつたよ。

お茶を飲み終つてから、小鬼がこつちこつちつ
て言うんでついて行くと家の奥から下に向かっ
て長いトンネルが続いているんだ。大切なもの
はみんなこの奥にあるっていうんで、まんまと
騙されてついて行くと、途中からもう明かりも
なくて真つ暗なのさ。

小鬼の姿も見えなくて声ばかりが聞こえてく
る。その声と言つんだ。罨から外してもらつたの

は確かにありがたいが、その罾を仕掛けたのはお前だろうつて。罾に掛けられた恨みと、罾から外してもらった感謝とどちらが上だと思うつていうんだよ。

オレは急におっかなくなってきたよ。もう小鬼の声もどこから聞こえてくるのかわからず、あたりは真つ暗だし、どっちが上でどっちが下かもわからない。とにかくほんとに怖くなつてさ。もう脚がガタガタ震えだしたよ。

まあいいさ、罾から外してくれたのは確かだからな。その声が聞こえたと思つたら、足元の地面がふつと消えて、そこからすーっと落っこちた。父ちゃんは木から落ちたんだろうつて言いつけど、実は地面の中から上に落ちての枝にぶつかったんだよ。

「わかったわ、それで腕を折つたのね」

「そうだよ」

「言つてやればよかつたのよ。兎用の罾にかかると小鬼が馬鹿なんだつて」

「いや、おれの罾を仕掛ける腕前がうますぎたのね」

「まあ、しょつてる」

「なあ、今度は魔物とどんな取引きをしたか教えてくれよ」

「そうね、いいわ」

リタはそれから魔物を呼び出して左眼と交換に魔物の持つ智恵を身につけたという話を語って聞かせた。ビノは時間の経つのも忘れてその話に聞き入った。

「智恵だつて！ そんなもの何の役に立つのさ」

「この世で一番役に立つものよ」

やがてカシノが帰って来て、リタに夕飯でも食って行けと言ったが、リタはお母さんに遅くなると言つて来なかったし、治療師がいつ戻ってくるのかもわからなかったので返事をためらった。「それなら、シチューの一杯だけでも食べて行きな。昨日作った兎のシチューだが、すぐ温めるから。こいつが罫で捕まえたのさ。それだけが取り柄でな」

「ありがとう、いただくわ」

リタは物語と現実が心地よく混ざりあうのを感じた。シチューを食べているうちに治療師が戻って来た。

「ああ、いい匂いだこと。あたしにも一杯おくれ」

治療師はシチューを食べおわると、ビノに大人

しくしているように念を押しした。そしてリタと一緒に帰り道についた。

「ビノは本当に家から一步も出ないでおとなしくしていたのかい？」

「そうなの。それにお茶をいれてくれて、蜜蜂の巣も食べさせてくれたわ」

「驚いたこと」

「とても楽しかったわ」

「まさか、お前さんに惚れたんじゃないだろうね」

「そんなことはないと思うわ」

「いったいどうやったんだい」

「たぶん治療師の考えている方法じゃないと思うわ。偶然なのよ。それだと不合格になるかしら」

「あたしゃ、正しいやり方なんて最初から知ってはいないよ。ただビノに手を焼いていたんでお前さんに任せてみただけさ。出来るとは思っていなかったんだよ」

「ひどいわ。それじゃあ、あたしを見習いにするつもりはないのね」

「そういう訳じゃないさ。少しの間でも大人しくさせておければ合格にしようと思ったんだよ。それから、どんな手を試したか聞いて、それがうまい手だったら、それで合格にしようと思った

んだよ。ところで、お前はどんな手を使ったんだい？」

そこでリタは好奇心でいっぱいなのピノがリタの左眼について尋ねたことから、その話に乗ることにしたのだと説明した。

「はあ、あの子は空想癖があるのかい」

「そんなことはないと思うわ。お話が好きなのよ」

「お前も空想癖があるんじゃないかい」

「それって、まずいことかしら」

「まあ、度を越さなければいいがね」

「次の問題は何かしら」

「もう暗くなる。マルカもお前を待っているだろうよ。次の問題は明日にしよう」

「なんだか楽しみだわ」

「これから最後の試験をするけれど、あたしを恨まないでくれ」

次の日、リタが治療師の家に行くと、治療師はそう言った。

「どうして？ たとえ、見習いになれなくても、

治療師を恨むのは筋違いだってわかってるわ」

「とにかく頑張って耐えておくれ」

治療師の言葉に、今度の試験は何かを覚えたり

するのではなく、何かに耐える試験だとわかった。大丈夫、我慢するのは得意な方だわとリタは思った。

「お前も、もう気づいていると思うが、この服はひどい匂いがするだろ」

「ええ、今まで黙っていたけれど、ほんとにひどい匂いがするわ。あたしが見習いになったらすぐに洗ってあげるわね」

「ところがそうはいかないんだよ。いや、洗濯はしてもらうけど。その後でまた匂いを付けているのさ。つまり、この服の匂いには病気を避ける力があるってことなんだ。だから、治療師になりたければ、この匂いに耐えてもらわなければならぬ」

匂いに耐える試験なんて、リタはまったく予想していなかった。無事耐えられるだろうか、あまり自信がない。

治療師はリタを家の中に入れて、目隠しをして椅子に座らせた。

「この方が匂いに集中できるからね」

「集中出来なくてもいいわ」

「もう我慢出来ないと思ったら、やめてとでも言うことだね。あたしは家の中にいるから」

治療師が何かを取りに行つて戻つてくると同時にすごくくさい匂いがしてきた。治療師はその匂いの元をリタの鼻先に置いたのか、ひどい匂いはさらに強くリタの鼻を刺激した。

つんと鼻を刺激する酢のような匂いや、いやな草のような匂いや、捕まえよつとするとおしっこをかけて逃げる虫のような匂いや、果物が腐つたような甘い匂い。その匂いが混ざり合つていつそつひどい悪臭になつていく。

治療師の黒い服の匂いや、黒い包帯の匂いに比べてもはるかに強くひどい匂いだった。服や包帯に匂いをつける元になつているものがリタの鼻のすぐ先にあるのだろう。

リタは息を止めて我慢しようとしたが、もちろん長くは続かなかつた。それから、口から息を吸えば少しは楽だろうと思つたりした。でも息を止めたり、口から息を吸つたりするのは匂いに耐えるという試験に反していいのではないだろうか。

あまりひどい匂いがしていると考えることもうまくできない。この試験はいつまで続くのだろう。お昼までには終るだろうかと考えてから、とてもではないが、お昼をおいしく食べられそ

うもないと思った。

ふと、治療師は本当に家の中にいるのだろうかと不安になった。全然気配がしない。しかし耳を澄ませていると、やがてかすかな物音が聞こえて来た。何をしている音かはわからないけれど、かさこそと何かのこすれるような音がする。

治療師が家の中にいることがわかると、リタは安心すると同時に臭い匂いにも耐えられるような気がしてきた。耳を澄ませて、治療師の立てる物音から、何をしているのか想像してみる。

歩いている時の音ははっきりわかる。なにか物を台の上に置く音もわかる。わからないのは何かをこすっているような音。水気のあるものを叩いているような音。

きっと、治療師としての仕事をしているのだ。それはリタが見たこともない作業だから音だけ聞いてもわからないのだ。見習いになって、一つずつ教えてもらえば、きっと音の意味もわかるようになるのだろう。

音の意味はわからなくても、治療師が働いている音を聞いていると、鍛冶小屋でお父さんが働いている時に、隅に座ってずっとその様子を見ていたことを思い出す。組合に所属する職人は

仕事をする時に調子よく軽快な音を立てるものらしい。

「こら、リタ。起きなさい」

治療師の声にリタは居眠りをしていたことに気づいた。急に恥ずかしくなる。

「まったく、なんて娘だろうね。こんなくさいところで居眠りするなんて。あきれたよ」

「ごめんなさい」

「まあいい、合格だ。明日からでも来ておくれ」

「わあ、ありがとう」

リタはすぐに家に飛んで帰った。

「お母さん、お母さん。合格したわ。明日からでも来てくれて」

「よかったわね。しかし、リタ、なんかへんあ匂いがしない？」

リタは自分の匂いを嗅いでみたが、もう鼻がばかになっていて匂いはわからなかった。それですぐに鍛冶小屋に行った。

「お父さん、お父さん。合格したの。明日からでも来てくれて」

「ちよつと待て。一級組合の見習い試験に受かったのか。だが、試験に受かってから考えるって

言わなかったかな。これからどうするか考えようじゃないか。それはともかく、おまえ、なんか匂うぞ」

遅れて鍛冶小屋に来たマルカが口をはさむ。

「お父さん、手遅れですよ。もし、あなたのごころに見習いになりたいという子が来て、試験して合格だと伝えてから、やっぱり止めますと断ってきたらどう思いますか」

「いや、それは……、よほどの事情があれば認めるよ」

「そんな事情があるんですか」

「うーむ、いや、父親が反対だというのは駄目かな」

「あなたはリタが治療師になるのに反対なんですか。だったら、試験を受ける前に言えばよかったです」

「いや、反対という訳ではないんだよ」

「お父さんがどうしても反対だって言うなら、あたし、治療師に謝ってくる」

リタは泣きそうな声で言った。

「お父さんはね、寂しがっているだけなのよ。見習いになると住み込みで働くのが普通だからね。大丈夫、家は近くなんだから、通いの見習いに

してもらえばいいわ。あたしが、ハンナに頼んでみるから」

「まあ、そういうことならいいだろう。おめでとう、リタ。頑張るんだよ」

「うん、あたし、きっと立派な治療師になってみせるわ」

「その前に、立派な見習いにならなきゃね」

午後にお母さんが、治療師のところに相談に行つて、リタの見習い生活を決めて来た。リタは夜は家で寝て、朝食を食べてから治療師のところに行き、見習いとしての仕事をする。昼食と夕食は治療師と一緒に食べて、その後やるべき仕事が終わったら家に帰るということになった。